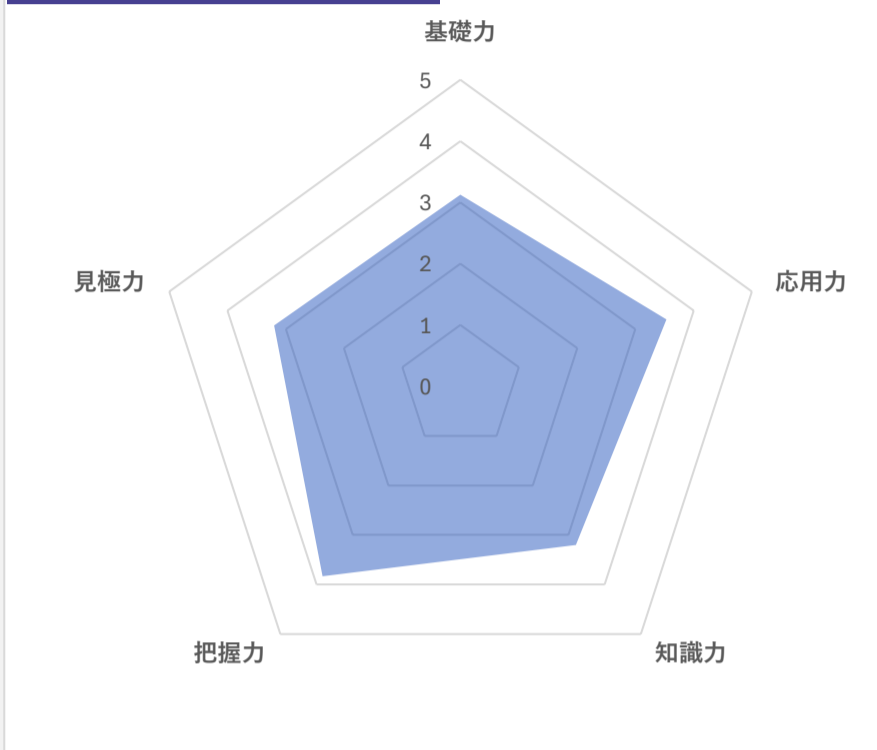


総合分析

試験区分	一般（後期）
------	--------

制限時間	60分（理科2科120分）	大問数	全4問
------	---------------	-----	-----

合格に要する能力（5段階）

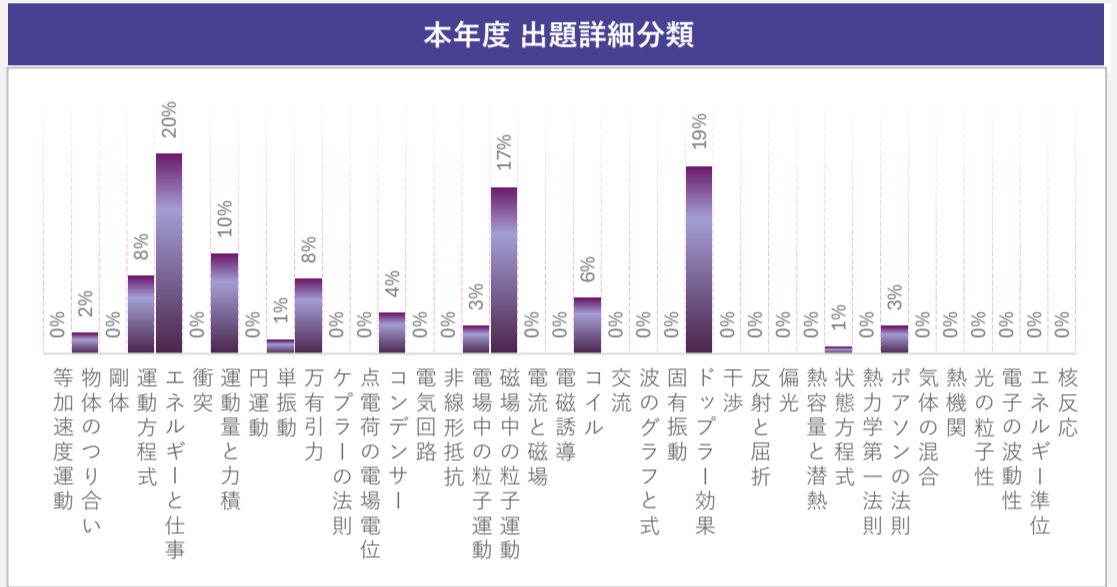


合格に要する能力（5段階）		
基礎力	2.9	原理についての理解
応用力	3.3	演習経験による慣れ
知識力	3.0	用語を正確に覚えているか
把握力	3.6	臨機応変に状況を把握する力
見極力	3.0	解きやすい問題を選択する力

出題分野	
力学	49%
電磁気学	29%
波動	19%
熱力学	3%
原子物理	0%

本年度 解答形式	
穴埋め記述	100%

本年度出題テーマ一覧	
第1問	系の保存則と重心
第2問	天体の運動とドップラー効果
第3問	電磁場中の荷電粒子の運動
第4問	小問集合



特殊問題の有無		
特殊問題の有無	近似計算なし	グラフなし
正誤問題なし	理由記述なし	数値計算なし

特記事項	特になし
------	------

総合評価

項目	数値	説明	標準	一次合格に必要な正答率（予想）	77%
難度	3.2	最難を5とする問題自体の難度	標準	高い正答率を要する	
分量	62分	完答に要する時間（制限時間は60分）	標準		

入試の特徴と対策

- ▶ 設問ごとにテーマが一貫しており、目標に向かう流れがある。速やかなテーマの把握が鍵となる。
- ▶ 入試問題としてありふれた題材が多い。単純に演習量で十分に対策できる。
- ▶ 概ね法則の運用に関する応用的な出題である。物理計算への慣れが必要となる。
- ▶ 同時に複数の事柄への理解を要する出題が多い。独力で解法を組み立てる力を要する。

入試から見る 大学が求める学生像

大問によっては大問の後半で難度の高い小問も見られるが、とれなくてよい程の高難度の設問は存在しない。難度のやや高い典型問題演習を重ねていればかなり高得点がとれる。誘導なしに解法を自分で組み立てる必要のある問題が多く、注意力の必要な問題もいくらかみられる。正確に解くためには時間がかかるため、満点をとることは難しいだろう。総じて勉強熱心で逆境でも高い注意力を発揮できる学生を求めているのだろう。